

桜島の起源

約 30,000 年前、鹿児島を深さ 60m ものマグマで覆うほどの巨大噴火がありました。灰や石、ガスなどが混ざった火砕流は地域の山や谷を覆い尽くし、一週間の間あたりは平坦になりました。そしてこの壮大な噴火により生まれた火山性クレーターのくぼみが、始良カルデラです。

その 4,000 年ほど後には、始良カルデラの南端に位置する桜島が初めて噴火しました。その後噴火があるたび、桜島は大きくなっていきました。北の峰、北岳は 5,000 年前に活動を休止。南の峰、南岳は 4,500 年前に活動を開始し、今も噴火を繰り返しています。

地形・地質

海拔 1,117 の高さを誇る桜島は、始良カルデラ形成後にできた火山で、北から南にかけて 3 つの主峰——北岳、中岳、南岳——をもちます。これら 3 つの主峰は 2 つの火山により形成されており、そのうち北岳は古く、もう活動していません。後発の火山、南岳は 1955 年より噴火を繰り返しています。尚、火口は中岳と南岳の二箇所にあります。

桜島のマグマは錦江湾の下からきており、誕生以来 17 回の大噴火を経験してきましたが、小噴火はほぼ毎日起きています。「桜島」の、“island” を意味する「島」にあるように昔は離島でしたが、1914 年の大正噴火がもたらした溶岩流により今は本土と陸続きになっています。

溶岩と植生

草木の少ない荒涼とした岩地とは程遠く、火山には膨大な種類の植物が自生しています。桜島の頂上付近では、火口の一番近い所にススキやイタドリが生息しています。そこから下ると、落葉性常緑樹

のヒサカキやヤシャブシを見ることができます。火口からさらに離れると、クロマツや月桂樹が生い茂っています。

溶岩流には多様性に富む植物が自生しています。桜島では5つの溶岩流が地表から露出しており、植生回復の進行を間近で観察することができます。有村海岸では、安永（1779年）、大正（1914年）、昭和（1946年）の噴火による、3つの溶岩流を見ることができます。昭和溶岩流の特徴は、むき出しの岩肌にたくましく育つクロマツです。大正溶岩流の植生はより青々としています。安永溶岩流には樹木が生い茂るようになりました。

文化・産業・生活

桜島自体の住人に加え、600,000人が暮らす鹿児島市も桜島の麓に位置しています。この地域への人間定住の長い歴史が物語るように、火山とともに暮らす生活は危険よりも恩恵の方が大きいことが伺えます。実際、農業に適した肥沃な土壌や、壁材に用いられる溶結凝灰岩、数々の産業に使われる灰など、火山は様々な恩恵を与えてくれます。

活動

独特な活動も豊富で、火山灰の陶芸クラスや、溶岩窯でのピザ焼き、夜間の噴火クルーズなどが体験できます。さらに登山やサイクリング、カヤック、温泉、ガイドツアーなど、桜島には誰でも楽しめるアドベンチャーが揃っています。

灰との暮らし

桜島周辺の住民にとって灰は生活の一部です。しかし、これが公害と考えられていないどころか、彼らは灰との共存の方法を生み出し、灰を利用する産業で利益まで得ています。路面清掃車で道路は

綺麗に保たれ、各世帯も家にかぶった灰を袋に詰めます。そして、天気予報には風向きも含まれ、天候にふさわしい備えを促します。屋外作業の際にマスクを着用する人もいますが、灰に健康上のリスクはありません。桜島周辺に何世代にもわたって暮らしてきた住人同様、ここに暮らす人たちは概ね普通の暮らしを営んでいます。